ネットの繋がり

元気

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『人と繋がる』

これほど簡単で難しいものはない。

青年は暗い過去を持つ独りの人間だった。その小さい頃の影響で人間を信じられなくなってしまった。

誰も信じることの出来ないなか、彼は国内最大級のＳＮＳ……【リアルアカウント】の中に入ることになってしまう。

青年はどう変われるのか。先にあるものは幸せか……死か。

『あなたは、人と繋がれますか？』

今、物語の歯車は回りはじめる。

目次

プロローグ
始動 ―― 1
恐怖 ―― 7
第一章　～リアアカと現実～
ゲーム ―― 13
エゴ ―― 20
傷 ―― 27
幼女 ―― 35
生放送 ―― 41

プロローグ
始動

『ういー今日はここまでー!!　閲覧あざしたー!!』
　机の上に載っているパソコン画面にそう向かって話すと、画面上にたくさんの白文字が右から左へ流れてきた。
［お疲れ様ー！］
［お疲れ様でした！］
［1時間おつ！］
　一通りコメントを見てから、青年は満足したように頷き生放送を終了させた。

「ふいー、疲れたぁー」
　パソコンをシャットダウンさせ、電源をしっかりと切ると、大きな欠伸をしつつ自分の椅子の背もたれに寄りかかった。
　大きく天井に腕を上げて、体の疲れを解す。そして一気に脱力し、腕をぷらーんと重力に従って下に降ろした。
「今日は何曲歌った……？」
　気だるそうに椅子から立ち上がって、自分のベットに向かって飛び込み、柔らかそうな枕に顔を埋めながら、青年は声を部屋に響かせた。
　青年の声は低く、誰もが聞き惚れる様な美声であった。元々の素材が良いのか、声だけではなく歌唱力も備えている。その綺麗な声と歌唱力が上手く混じり合い、一つの作品ができた。おもしろ半分、不安が半分の状態でネット上に公開したその日から、予想をいい意味で裏切り、青年は爆発的に人気者になった。それが彼……『アルシエル』の誕生だった。
　イケメンボイスと言われる他、高音もよく出て、心地いいと評判で、それに加え音程も正確である。とコメント欄で溢れているが、もちろんアンチコメントもしっかりある。
　それでも彼はめげること無く、歌うことに夢中になっていた。

「あー眠い……」
今にも閉じそうな瞼を無理やり開いて、ベットに放り投げていた携帯を開いた。
とあるアプリを開くと、自分のつぶやきに何件ものコメントが来ていた。コメントの内容は先程の生放送の感想などが濁流のように流れてくる。止まることのないコメントを半目で見ながら、彼……アルシエルは指で画面をスクロールさせた。
当たり前であるが、もちろん全てが賞賛している訳では無い。自分の悪かったところを容赦なく叩くコメントもある。しかし彼はそのコメントを見つけてはしっかりと読み、反省することを日常としていた。……が、今回は眠気が強いらしく、今にも瞼は閉じそうだった。
「……」
瞼が閉じると、彼の意識は遠く、遠くに飛んでいった……

ハズだった。
「ぐはっ!?」
突然、空中から落ちる感覚がして気がついた時には、彼のお腹と顎に衝撃が電流のように流れ、彼の眠気を一気に覚ました。
「えっ!? え?」
辺りをキョロキョロ見渡すが、そこは先程まで自分がうつ伏せで寝ていたベットの上ではなく、見知らぬ場所の床だった。
それなりの衝撃が彼を襲ったため、彼の整った顔立ちから見える、痛さで赤くなってしまっている顎はそれなりに浮き立って見えていた。
しかもそこにいるのは自分だけではなく、他の人間までいるのを、今、彼は知ることになる。
「あの、大丈夫……ですか?」
突然声をかけられて、体をビクッとさせ、恐る恐る顔を上げると、そ

ここには一人の女性がいた。
声のした方を見ると彼と同じ目線になるように、しゃがんで、心配そうに顔を覗き込む可愛らしい女性だった。
短い黒髪に、大きな目、左目と口元にあるホクロが大人っぽさを醸し出している。全体的に整っている顔に、大人しそうで落ち着いた雰囲気。これをまさに美少女と呼ぶのだと、この時彼は思った。
「あっ、はい……大丈夫です」
落ち着いた様子で彼は起き上がると、自分の服をパンパンと払った。そして、あることに気づく。

「あっ、顔見せちゃった……」
「……？　顔がどうかしたんですか？」
不思議に思った彼女は可愛らしく首を横に傾げるが、青年は誤魔化すように苦笑いを浮かべるだけであった。まるで何かを隠すように。
「ん、大丈夫ですよ。気にしないでください」
無理やり笑を浮かべて、さりげなくフードを被った。
幸い、出かけた後に生放送したおかげか、服装は部屋着ではなかったことに軽く安堵した。これでもしも部屋着だった時のことを考えると、軽く身震いするところである。
なんにせ、部屋着には顔を隠せるようなフードがないからである。マスクがあれば少しはいいのだが、部屋ではマスクは着用しないタイプなので、顔を覆い隠すようなものがあるのが、不幸中の幸いである。

青年がフードを数ったことに違和感を感じたのか、黒髪の女性は声をかけようとするが、次の瞬間そんなことを忘れるくらいの衝撃が彼女を釘付けにした。
「おいあれ、マーブルじゃね？」
誰かの呼びかけるような一言。誰かが気づいて指さされた方を向くと、集団心理が働き、皆が指さされた方に視線を移した。その中の

一人の人間として、二人も視線を向けた。
そこには、見覚えのある顔をしたマスコットキャラクターがいたからである。

「はいどうも～　皆さんおなじみマスコットキャラのマーブルです」

【リアルアカウント】
国内最大級のＳＮＳの名称で、ここ最近では誰もがスマホを片手に持ってリアルアカウント……通称『リアアカ』をするほど有名なサイトである。気になった人をフォローしたり、逆に気に入られたらフォローしてもらえたり……また、一言をつぶやいて『いいね』を貰ったり、お互いにメッセージを送りあったりすることが出来るサイトで、１０人に９人くらいの確率でリアアカをしているほどの人気っぷりである。

そんなリアアカについ先程、大量の人間がリアルアカウント内に入ったことを青年は知ることになる。
「リアアカに夢中になってる皆さんの脳を、リアルアカウントの中に閉じ込めたのですよ！」

そのたった一言は、大量の人間を混乱させるには十分だった。
「はっ？　何言っちゃってんのアイツ、頭大丈夫か？」
ちょうど隣にいたチャラめの男性が、頭を気だるそうに掻きながらそんなことを呟くと、瞬く間にありえないような出来事が起こった。

どぷゆり
そんな気味の悪い……何かを突き抜ける音が、隣から聴こえてきた。恐る恐る首を動かし目で確認すると、青年は恐怖で半歩ほど後ろに下がり、目を大きく見開いた。
近くにいる人も、視線を向けさせるが、誰もが言葉を飲み込み、息が止まった。

そこにはステージ上に立っているはずのマーブルが、届くはずもない腕を触手のように伸ばし、ついさっき隣で呟いた男性のちょうど心臓にあたる位置に、触手の様に伸びている腕を貫通させていたからだ。

「おっとすみません。腕が滑ってしまいました」

鼻をほじりながらマーブルは何事もないように腕を元に戻すと、動かないはずの顔がニッコリと、不気味に笑ったような気がした。

「あっ、言い忘れていましたが、ここ……リアアカ内で死ぬと、死んだ人をフォローしていた現実世界にいるフォロワー達も巻き添えになって不審死するんです～!!!」

一瞬の静寂が、この場の空気を凍らせた。そして、一気に会場が混乱の渦で染まる。

「ウソ…ですよね……」

先程の美少女は、口元に手を当てて、目に涙を浮かばせていた。恐怖で脚がガクガクと震えてしまっていて、立つだけでも精一杯である。

青年は先程まで生きていた人間が、自分のすぐ近くで死んでしまったことを、未だ信じれずにいて、冷たくなっていく死体を、ただただ呆然と見ることしか出来なかった。

「はいはい、落ち着いてください皆さん。怖いのは中の人だけではなく外の人もなんですよ？　そんな外の人達になんと……3分間だけフォローを外せるようにしておきました!!　躊躇わずに外しちゃって下さいね！　ただし、フォロワーが0になると中にいる人は死ぬので気をつけてください。さぁ、フォロワー同士のキズナ、見せつけちゃって下さい♡」

マーブルが言い終えると、周りは悲鳴と絶叫……懇願の声で溢れかえり、誰もがこの状況で冷静でいられる訳がなかった。

ただ一人を除いては。

恐怖

悲願と絶叫で染まり、混乱の渦に飲み込まれているリアアカ内は、もはやカオスな状態に陥っていた。彼らをこのようにしたのは、とてつもなく簡単な理由だ。

死ぬという恐怖。

その感情で一杯になり、死にたくない一心でリアルの世界にいる人間に頼み込む。それは生きるためならば羞恥という名のプライドをドブに捨て無ければならないのだが、羞恥心という感情などハナから無かったように感じられるほど、醜いものであった。

そんな死の恐怖で、周りが支配されているはずなのにも関わらず、彼……『アルシエル』はそこまで焦っては居なかった。と言うよりも、焦っているようにはみえないのである。通常、自分の生死が同類である人間の手によって左右されるとなれば、焦るのは無理もないだろう。いや、少なからずは焦るのが普通の人間である。

しかし彼は、焦る素ぶりも見せることなく、ただただ黙って端末の画面を見るだけだった。

そこまでして落ち着いている彼は、周りから浮きすぎて、逆に異常に見える。否、異常なのだ。

たしかに彼は、それなりに成績を残してたくさんの後ろ盾がいるかもしれない。しかし不安は完全にはかき消すことは不可能である。なんにせ、ここの世界……【リアルアカウント】内では、フォロワーは自分の命と変わりないのだから。

フォロワーが一人減る事に自分の命が削られるような感覚が襲い、いつ死んでもおかしくない状況下で、冷静にいられる方が異常なのである。

彼の端末から映し出された数字は、最初の数字からはかなりの量が減ってしまっているが、人数的には２０４３人という高い数字を残していた。そこからは一方も減る様子はなく、彼、アルシエルに２０４

３人の人間がついていくということになるのである。逆に言えば、２０４３人が彼の行動一つで巻き添え死してもいいという覚悟があるということだ。

だが、彼をそこまで冷静にしているのは、それが理由ではない。
彼の、心の奥底に冷えきった感情が、そんなこ死とでは揺るがなかっただけだ。

そして、自分の中にいるもう一つの人格が動き出した。

「フォローしてくれる人に…申し訳ないな……」
自分に言い聞かせるよう、彼はそっと静かに呟いた。
その目は虚ろで、自分の端末を見ているはずなのに、まるで遠い遠い何かを見ているようだった。

『偽善者め』
ズキっと、頭に亀裂か入るような痛みが彼を襲った。
激しく打ち付けられるような痛みが何度も襲いかかり、視界が段々とぼやけてくる。それはまるで、記憶が蘇るのを邪魔するかのように何度も何度も繰り返された。
次第に立っていることも辛くなり、脚がふらついてしまったが、その瞬間、脳が覚醒し、閉ざされていた記憶が今、溢れた。

「ほら、もっと飲めよ!!」
「ゴホッ…も、ぐっ…飲めな、い…んぐっ!!!」

小さい頃の、つまらない記憶

「お前に触るとデブが移る」
「そ、そんなことないよ……」

毎日容赦なく浴びさられる暴言

「もう来んな。死ね」
「死ね……って…ひどいよ」

俺の居場所はどこにも無かった

いや、作らせてくれなかった。作ってもらえなかった。
悔しくて、悔しくて、悔しくて悔しくて悔しくて悔しくて。
見返してやりたくて、努力したら、手のひらを返したように、中学の奴らは寄って集ってきた。
いつからだろうか、人間のコトを信じれなくなったのは。
所詮人間は自分勝手な動物だった。

そんな人間に絶望した時、俺は心が冷たくなったのを感じた。
溶けることのない氷が、鋭く尖って凍っていく。冷たく、冷たく凍っていった。

それから、表面上を取り繕うようになった。本心を隠して、生きることを決めた。
本心を隠して生きていたせいか、もうどれが本心か分からなくなってきた。
だからか、疲れだけが体に蓄積される。

――そこで俺は歌うことにした。

初めは軽いストレス発散だった。けど、歌っていくうちに夢中になっていった。
歌は自分の冷めた心をあたためるのには十分だった。
だから歌い続けた。けれど完全には溶けきることは出来ない。
いつも指摘されるのは「感情がこもっていない」の一言。
それは自分でもよく理解している。していないわけが無い。
感情を入れて歌いたくても、どうすればいいのか分からない。
感情を入れろと言われても、そもそも氷きった心のせいで感情が分からなくなった。

悲しいって、なんだ？
苦しいって、なんだ？
嬉しいって、なんだ？
悔しいって、なんだ？
楽しいって、なんだ？

心から感じることの出来る感情が亡くなった
中学の時にはあった感情が失った
もう一度、ごちゃごちゃに混じってしまったその感情を
俺は見つけたい。

――だから、失った心を見つけるために歌うのだ。それが、俺の歌である。

『偽善者』
分かってるよ。
『表面上だけのくせに』
うるさいな……
『だからいつまでも独りなんだよ』
「黙れ!!!」
「っ!?」

彼は大声で叫んだ。

ハッと意識を取り戻して、隣を見てみると、驚きと恐怖が混じりあった顔をしたあの女性だった。

「す、すみません……」

「あっ。えっ……と、ゴメン」

驚かせてしまったことを素直に謝る彼は、顔は本当に申し訳なさそうだった。ただ、それが本音なのか偽っているのかは、歪んだ少年には分からない。

ただ分かるのは、彼女がまだ生きてここにいるということは、彼女は少なからずフォロワーが0になった訳では無いということぐらいだ。少年はぼーっとした頭を振って、頭を切り替えると、すぐに青年に戻る。

「あのさ、俺と関係を持たないか？」

「……へっ？」

突然の一言で、彼女はピキっと硬直した。それはもう顔を赤くして。

「あっ、いや……あの、ごごご、ごめんなさい！　わ、私……その、彼氏がいる…ので……」

ごにょごにょ小声でそう気まづそうに言うと、青年は首をかしげて不思議そうな顔を浮かべた。

「？　相互フォローしようって意味なんだけど？」

「ふぇ!?　そ、そうなんですか!?　そ、それならいいですよ!!」

どこか安心したような、力が抜けたような顔になると、女性は何も言わずにフォローしてくれた。

そんな彼女の行動に、彼は驚きを隠せないでいた。

「俺が死んだら、お前も死ぬんだぞ？」

「……そうですね」

「嫌じゃないのか？」

少年の疑問に、少し間を開けてから彼女は答えた。

「あなたなら信じてもいいかなって、思ったんです」

その一言は、少年には刺激的だった。
『信じてもいい』この一言は、彼の人生では一度も言われたことのない言葉だった。
いや、何度か同じクラスの人と会話した時にその単語はでてきてはいた。しかし、それはあくまでもその場での言葉なだけであり、確実ではない。
しかし、今は別である。いつ死んでもおかしくないこのリアアカ内で、信じると言われたことは、彼にとっては衝撃が大きかった。
「そうか……」
少年の顔は真顔だったが、ほんの少しだけ微笑んだようにも感じた。
「俺の名前は、早瀬　或。よろしくな」
「藤巻　チホです。よろしくお願いしま……す」
彼女……チホの端末から通知の音が鳴り、彼……或の情報がチホに渡った。そこまでは一連の流れで問題なく進んでいたのだが、再度チホの動きが止まり、表情が固まった。画面に目を釘付けにされたように動かない。
数十秒経ってから、彼女は顔を恐る恐る上げて、或……いや『アルシエル』の顔を覗いた。
「あ、あのっ……ある、ある…」
途切れ途切れに聞こえるチホの声は震えており、緊張している事がよく分かった。
そして、トランシーバーのように途切れていた声がやみ、息を整えてから小声で質問した。
「アルシエルさんですか？」
「見ての通り」
「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!」
チホの叫び声とともに、マーブルがゲーム終了の知らせをした。しかし、彼女はそんなことなど気にすることなく、口を金魚みたく、パクパクと開けたまま動かなくなった。それはまるでそこだけ時間が止まっているかのようだったそうだ。

第一章　～リアアカと現実～

ゲーム

たった三分間で大量の人間が犠牲になった。

フォロワーが０になった瞬間血を吹き出し彼らはバタバタと死んでいった。それが赤の他人なら良かっただろう。しかし、ハズした人間の中には自分の親しい友人、恋人、家族などいるのが心底憎たらしいと、目の前で死んでいった人間をみて青年は思っていた。

しかし、それは憎たらしいと思うだけであり、実質、死体を見たところで悲しくとも何ともない。恐怖すら湧き上がらない自分の本心に素直に呆れているのが現状だ。

「別に、そんな緊張しなくてもいいのに」

「む、無理ですよそんなこと!!」

ゲームが終わり、無事に生き残った二人はマーブルの指示に従い、腕に記された番号の部屋に向かって歩いていた。

先程のゲームで、或とチホは相互フォローし、お互いの情報を共有したわけだが、今、目の前にいる青年がアルシエルだと知った瞬間、チホは緊張で固まってしまってしまった。

「そんなになんなくても……」

ガチガチに固まっているチホを横目で見ながら、静かに呟いた。

アルシエル。リアアカ内でも名を響かせており、たった一回の歌ってみた動画をあげて以来、一躍有名人となった。歌っていくうちにファンは徐々に増え始め、国内人気アイドル――椎葉　サヤにも認められたと噂されているほどの人気っぷりだった。その勢いは、リアア

カに入ってからでも勢いを落とすことなく、フォロワーが少なからず増えていっている。
歩いていると、チホは何度か彼をチラチラ盗み見してから、重たそうな口を開いた。
「にしても……アルシエルさんって、その、アイコン画面と全然違う顔ですよね」
チホが少し申し訳なさそうに或に向かって言った。その言葉を聞いて、少年は無言で俯く。

有名歌い手、アルシエルのアイコン画面に写っているのは、醜い顔をしたデブであった。誰もが引くぐらいの醜さであり、ファンからはすぐさまアイコンを変えて欲しいと殺到したほどであった。
［イメージが崩れる］
［せっかくいい声なのにやめて欲しい］
［マジでデブスじゃんｗｗｗ］
このアイコンにしてから、一部のファンは嫌すぎて離れてしまうほどのだった。しかし、それでも自分を受け入れてくれている人もいる訳で、青年はそんなファンの人たちに感謝していた。
初めの頃は、友達に描いてもらった自分の絵を載せていたのだが、敢えて今の画像に変えたのである。それはもう一つの自分がそうしたかったからだ。

『やっぱり、人間はクズじゃねーか』
離れていったファンや、自分に送られてきたリプを見て、少年は冷たく言い放った。光の宿っていない軽蔑混じりの冷たい目で画面を見ていたのも記憶に新しい。しかし、もう一人の自分は首を横に振る。
『それでも、残ってくれる人がいる』
実際、殆どの人はアイコン画面を変えようとしないアルシエルに対して、少しばかり不安を抱いてはいたが、今はそんなことを気にする

ことなく現在進行形でファンを続けてくれている。

そんな状況のなか、早瀬　或の中で二つの意見が飛び交っていた。

『奴らは信用できない』

『顔だけで判断していない』

『どうせ流行に流されてるだけだ。そのうち離れる』

『少なからず残ってくれている』

『表面上だけのクセに』

『本心で喜びたいんだ』

もう一人の自分を鋭く睨みつける自分。正直もうどれが本当なのか分からない。自分とはどんな人物で、どんな性格をしていて、どんな風に見えるのか、全てが分からない。

分からなくなった感情はどんどん膨れ上がり

最後に残った感情は『何も感じない』の一つだけだった。

そんな自分に彼は鼻で笑い、軽蔑し、自嘲した。

「もう、わかんねぇよ」

最後に呟いた叫びの声は、周りの雑音に掻き消されて、誰にも届くことは無かった。

先に進んでいくと、ある場所に着いた。

そこにはステージがあり、ステージ上に何やらボタンがあるらしく、何かを始めるということは或だけではなく誰もが感じ取った。

「ここでも何かやるみたいだな」

「うぅ……少し怖いですね」

チホは先程の大量に死んだ人間を思い出し、身震いした。

下手したら自分もあんなようになっていたと想像するだけで、彼女の脚は恐怖で震え始める。
そんなチホの様子に気づいた或は、黙ってチホを見つめていた。
何て言葉を掛けてあげるのが正解なのか、彼にはわからない。感情が麻痺しているせいで、かなり普通とズレているため、こんな時にどんな慰め方をしたらいいのか、彼にはわからなかった。

だから青年は、今までの経験をフル活用して考えた。その結果、笑顔を作り、チホの背中を摩る選択をした。
ビクっと体を震わせたチホだが、或が自分を落ち着かせようとしてくれている事に気づき、安心したのか優しく微笑んだ。

「ありがとうございます」
落ち着きを取り戻したチホは、笑顔で或にそう言った。何も知らず笑顔で言うチホが、彼は眩しく見えた。本心から自分も笑えたら、どれほどいいか。そんな思いが横切るが、青年は笑顔を崩すことなく
「どういたしまして」
フードを深く被り直して、そう、無機質な声で言った。

「はいどーも皆さーん！　この部屋の司会を担当いたします。マーブルの分身、マーブル六号でーす」
その言葉にこの部屋にいる人達がザワザワと口を動かした
「六号ってなに？」
「そんなにマーブルいんのかよ」
「さっさと現実に返せっての……」
様々な人間が自分の思ったことを静かに呟いたり、隣にいる人間に話しかけ始めた。
人という動物は、口々に文句を言ったり誰かと話すことで、心に染み付いた恐怖という感情を誤魔化す。それは人間の性質とも言えるであろう。一度植え付けられた恐怖は一人で抱えるのには荷が重過

ぎる。なら、一人で抱えるのではなく誰かと共有するなら怖くない。そう、人間は思うのである。
まさにその状況にあるこの部屋。誰もが不安の渦に飲み込まれていった。
そんな人間をみてマーブルは怪しく微笑んだが、誰も気づくことなく話は進められていく。

「みなさんは、自分のスマホにいったいどんな画像を入れていますか？」

マーブルがここにいる人間に問いかけると、みんなは自分のスマホに目を移した。
「ここでやるのは『悪いいね！　ゲーム』です。皆さんのスマホの中に入っている画像を一枚ランダムで選出されます。その画像を第三者目線でどう思われるか予想し、ステージ上にあるボタンを押してもらうというゲームです！　選出された画像を審査するのはこの中継を見ている現実の皆さまです！　参加したから死ぬ……という危険はないので、バンバン参加しちゃって下さい！」
マーブルが言い終わると同時に、周りは一斉に自分のファイルを開いた。スマホ内に入っている画像を消去すべく急いで消そうとするが、マーブルの補足説明でその行動は無駄に終わってしまう。

「今、急いで消そうとしている人……無駄ですよ。ゲーム中は画像を消すことは無可能でーす。あっ、言い忘れていましたが、もし予想が外れた場合はその瞬間フォロワーもろともゲームオー(死)バーですから気をつけてくださいね☆」
周りが慌てふためくなか、ただ一人平然とした顔でその場に立っているのは、感情を失った少年だった。
彼は自分のスマホに入っている画像を見ては、顔色ひとつ変えることなくスクロールしていた。
「あ、アルシエルさんは、落ち着いていますね」

未だにさん付けなのが少々気になってるようだが、彼は余裕そうな顔を崩すことなくスマホの画面から顔をあげた。
「俺の中にある画像は、いいか悪いかの二択にハッキリ別れてるからな。迷う必要が無い」
そう言い切る或を、チホは尊敬の眼差しで見た。彼から放たれている自信に満ちたオーラは、何度も経験したプレッシャーというモノの乗り越え方を知っているからこそのものだった。
リアアカに限らずで有名になるということは、年齢制限関係なく、いつでも誰かに見られているという感覚が付きまとうことになる。そのため、ちょっとした悪い発言をするだけでも、人気があればあるほど叩かれしまつとなるのだ。
だからこそ、アルシ彼エルのファンの一人として彼女の目から映るアルシエルは、より一層神々しくみえた。

「あと、アルシエルって呼ぶとバレるから、普通に或で呼んでくれれば嬉しい」
言い終えると彼は、ぐいっとチホの顔に近づいて小さく囁いた。
突然の出来事で、チホの心臓がバグバグと激しく脈打つ。憧れのアルシエルに右耳から小さく囁かれてしまっては、心臓が大きくとびあがるのもムリはない。
彼の整った顔がすぐ近くにあることと、自分の大好きなアーティストが自分に囁いたという興奮と嬉しさで、チホはまたもや顔を赤くした。
それと同時に、彼氏の顔が頭を横切り、罪悪感も生まれる。
「は、はい……或さん」
ぎこちない笑を浮かべて、チホは或から離れたのだった。

「それではさっそく、１２０１番の人どうぞ！」
「わっ、私ですか!?」
マーブルの呼びかけでハッとするチホ。半歩進んでから或の方に

顔を向けて「行ってきますね」そう、一言残してからステージに登った。

「行ってらっしゃい……くれぐれも死ぬなよ」

数少ない、少しだけだが信頼している人物が、この命のかかったゲームで一番最初にやるプレイヤーとなると、心配になるのは当たり前である。しかし、これが本当なのか偽善なのか、本人にもわからなかった。

エゴ

［顔写真みたいなー］
［アルシエルさん声いいから絶対にカッコイイよね！］
［イケメンオーラがでてる］
歌い終わったあと、リアアカで呟くたびにこのような返信がよく送られてきていた。
声だけで勝手に自分で理想絵を想像し、更に期待を高めるファンの人たち。現実逃避するかのように、自分の想像を勝手に押し付けられ、もしその想像以下だった場合、何事も無かったように離れる群衆。
大抵そうである。自分の思っていたモノよりはるかに下回った時、手のひらを返すように罵り、唾を吐く。

そんな残酷な世界を生きているアルシエルは、このようになってしまった人達や、望んでいない結末の末、消えらざるをえなかった人をたくさん見てきた。
自分の好きだった歌い手さん。彼はとても歌唱力があり、力強い歌声を披露し、性格的にもいい人間だった。しかし、一部のファンの奴らが、彼の顔写真を見つけた瞬間、灼熱の炎が急速に冷めていくのを目の当たりにした。
［えっ、なにこれｗｗｗ］
［めっちゃ、ぶっさいくやんｗ］
［うわー　ないわー］
［消えろよｗ］

彼のファンだった奴らは、そのような悪口を言って去っていった。
そして彼本人も、ファンだった人たちが自分から離れていったショックで、歌う活動を辞め、ネットから姿を消した。

所詮、人間は大抵顔で決まる。
そう確信したのは、歌い手活動を本格的に始める一週間前の出来

だった。

時は現在に戻り、今、アルシエルこと早瀬　或は、リアアカ内に閉じ込められていた。

手にはスマホを持って、ステージ上にいる知人のことを静かに見守っている。彼女……藤巻　チホは両手を合わせて、変な画像が来ませんようにと、必死に願っている最中だった。

そしてとうとう、その時がやってきた。

「皆さんご注目、選ばれた画像は～～～これだぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

「……きゃあああああ!!!!」

一瞬の沈黙のあと、大きな悲鳴が部屋中にこだました。しかし、チホの叫び声なんか聞こえないと言わんばかりに、誰もが目をモニターから逸らすことなくガン見している。特に男性たちは、口をだらしなく開いたり、眼球が飛び出るのではないかと思うくらいに目を見開いたり、写真に収める者、更には息をハァハァ言わせる者までいるほどだ。

チホのスマホから選出された画像は、彼氏に宛てた手紙を口に咥え、全裸で自撮りをしたものだった。

彼氏宛に書いた紙には『ユウジくんへ　一ヶ月記念♡　オカズにしてね／／／』と書いてあり、少し恥じらっているのが分かる絶妙の顔でピースサインし、その紙を咥えていた。

更に、大人しそうな顔の割に反比例している大きな胸。また、白く細いウエスト。まさに男という男の視線を集めるには充分なボディであった。

当のチホは、飛び跳ねて両手を振大きく動かして隠そうとするが、

それも虚しく、モニターがあまりにも大きすぎるため無駄な行動に終わってしまう。
「さあ、現実の皆さん、投票をお願いします!!」
マーブルが現実にいる人たちに呼びかける。
正直、この写真はどう考えても『いいね』で確定だろう。と、青年は軽く安堵した。
「見ないで!! これは彼氏のために撮った写真で……」
顔を今までにないくらい赤く染めて、彼女は死に物狂いで飛び跳ねている。正直同情してしまうほど恥ずかしい写真で、今後彼女の黒歴史となるであろう。そう、青年は未来予想図を描き、苦しそうに顔を歪めた。
「さぁ、悩んでる暇はありませんよ! 三十秒以内にボタンを押さないと即ゲームオーバーですからね!!」
マーブルが急かすようにチホに向かって言い放つと、チホは今にも泣きだしそうな顔でチラッと、或に助けを求めた。それに気がついた或は、少しばかり申し訳なさそうに首をすくめて、いいねボタンを押すようにジェスチャーする。
現時点で彼に出来ることは、チホのスマホから出た画像を客観的に評価することだけである。
そばに行って助けることも出来なければ、大声で話しかけたところで時間が来てしまう。そうなれば死ぬのはチホのフォロワーである自分だけではなく、自分のファンの人たちも巻き添え死してしまい、或は大量殺人犯以上に人を殺してしまうことになる。
それだけは必ず避けたいため、とりあえず落ち着いて彼女に指示を出したのだった。
チホは或のジェスチャーを理解したのか、先程よりも顔を赤らめてコクリと頷き、やけくそになったのか大声で叫んだ。
「ちっくしょ――――!!!!」

結果、彼女の予想は無事に的中し、クリアすることができた。
圧倒的『いいね！』多数でクリアすることができたものの、あんな恥ずかしい写真が出てきてしまったため、彼女には相当なトラウマが植え付けられてしまっただろう。

そんな彼女が、羞恥心で染まった顔を手で覆い隠して、部屋から出ようとすると、背後から男性という男性からの「いいね！」という称賛の嵐を浴びるのだった。
現に或の周りにいる野郎どもは全員親指を立てて「いいね！」と大声で言っていた。それも顔を緩ませて。

……正直、下心が丸見えである。

「さて、チホはクリアしたことだし、今度は俺の番か……」
青年は拍手していた手を止め、袖を巻くって腕に記された自分の番号を確認した。
「１２１５……か、あと十四人」

袖をゆっくりと下ろし、青年はスマホに視線を移し、静かに指を動かした。
高速でタップを繰り返したり、文字を打ったりしている間に、徐々に彼の順番が迫ってくる。率直に言うと彼の行動はこのゲームのクリアとは全くもって関係の無い。しかし、偽善者である青年にその行動は意味があった。それは後に、彼にとって都合のいい方向に持っていくことが出来ることを、少年は知っているからである。

そしてとうとう、彼の出番が回ってきた。
「１２１５番～」
マーブルが自分の番号を読み上げたので、彼は自分がやっている作業を一時中断させた。そして、ステージへと顔を向ける。

「……行くか」
フードを深く被り直し、彼は堂々と歩き始める。人が彼の進む道を開け、黙って彼を見つめた。
彼は恐れることなくスマホを台にセットし、鋭く目を尖らせる。その目は大きなモニターに向けられていた。彼には自信があった。彼の画像には困るようなモノはない。０か１００のどちらかである。
そして今回彼から選出られた画像は――――０であった。

やっぱりな。所詮人間はそんなもんだ。
俺はモニターに映し出された画像を見た瞬間、すぐさま『悪いいね』ボタンを押した。

「おえっ……気持ち悪っ!!」
そんな声が聞こえた気がした。
「なんだアイツ、あんな事してんのかよ……」
「うわぁ……正直ありえない…」
「可哀想」
画像を見た偽善者どもが、口々にそう呟く。俯いて出来るだけ画像を見ないようにしている人もいれば、顔を上げて俺を睨みつける奴もいる。

可哀想。そうやって同情したり、この画像を見て怒りが込み上げてくるやつらに限って、いざとなると逃げ腰になるのだ。実際に、このような場面に遭遇したら、殆どの人間は何事も無かったように通り過ぎるだろう。現にそうだった。
まあ、全員がそういう訳では無いと思う。ほんの極一部の人間なら

助けてくれるに違いない。問題は、そんな勇気のある奴に出会えるか出会えないかの違いだ。

「はい、投票が終わりました～！　結果は……もちろん悪いいねでした！　まあ、普通にこの画像は人間性を疑うような画像でしたね～」

モニターにはこの画像の感想が映し出される。

［最低。マジでありえない］

［人間としてどうだよ］

［脳みそイカれてる］

その感想をみて、俺はついつい笑ってしまった。

笑って、とにかく笑って、懸命に叫びたい衝動を抑える。鎖骨辺りにある印を服越しから触った。

「可哀想って思うなら、次こーゆーの見かけたら必ず助けてくれるんだろうな？」

俺が煽るように言うと、観衆は怒りを爆発させて俺に向かってブーイングをかました。

……まったくコイツらはエゴな奴らばっかだな。

「あたりまえだろ!!」

誰かがそう叫んだ。

俺は不敵に笑いながらステージから降りて、近くにいた中年男性に近づき、鳩尾に思いっきり蹴りを入れた。

「ぐおっ……!?」

中年男性は鳩尾を抑えて、嘔吐物を吐き出しながら地面に崩れ落ちる。ゲホゲホと、苦しそうに咳き込み、震える。

周りにいる人は驚き戸惑い、沈黙が走った。静寂な空間に男性の苦しそうな声が響き渡る。

さらに攻撃するべく、俺は無心で男の頭やら背中やらを、躊躇なく

蹴り続ける。
躊躇うことに抵抗のないせいか、男性は徐々に弱々しくなっていき、今にも気絶しそうである。ちなみに、誰かが止めるまで、俺はやめるつもりは無い。

数分間同じことを続けるが、誰も動かずにその場に固まっている状態だ。
「まあ、こんなもんだよな」
最後に気絶させるべく、俺はサッカーボールを蹴るかのように、助走をつけて蹴りあげようとした瞬間

「もういいだろ!!!」
そう、誰かが叫んだ。

ピタッと脚を止めた先には、男性を守るように庇い怒りに満ちた顔で俺を睨みつける青年がいた。

それが俺と――向井　ユウマとの初めての出会いだった。

傷

上げていた脚を降ろして、少年は男性を守るように庇っている正義感が強そうな青年を、正面から睨みつけた。お互いに引くことのない睨み合いが続き、両者とも視線だけで牽制をしている。その姿はまるで、ライオン同士の喧嘩のようにも見え、第三者の入る隙はない。

その緊張感が周りにも伝わっているのか、誰一人と言葉を発する者はなく、黙って固唾を呑んでいる。

男を庇っている青年から、汗がたらりと気持ち悪く頬から床に落ちていった。しかし、それでも動こうとしない青年をみて、少年は静かに笑う。

「ふっ、ははっ…やっと来たよ」

コツコツと、足音を鳴らして青年に近づいてきた。フードでよく顔が見えないが、その笑顔を感じるだけで背筋が凍るような感覚が青年を襲う。ユウマは半歩下がりそうになる自分の脚を必死に堪えて、向き合い続ける。

ここで逃げたら、この人がまた辛い思いをする!!

青年のたった一つの感情が、恐怖という感情に歯止めをかけていた。

「俺は退かないから……な……」

恐る恐るだが、力強く青年は言うが、突然、目を疑うような現象が起きたため言葉は途中で空気に溶け込んだ。

青年……向井　ユウマが見た先には、先程まで自分が容赦なく蹴り続けた相手に謝罪している青年がいた。それも床に座って、額をギリギリまで床に近づけている。

その様子に驚いているのはユウマだけではない、彼の行動を見ていた全員が目を見開き、顔を驚愕の色に染めていた。

「――すみませんでした」
頭を下げたまま、青年は男性に謝る。
「僕は、貴方様に酷いことをしました。突然、あんなことされて許されるとは思っておりません。それでも、僕が貴方様に今、出来ることはこのような謝罪のみです。現実に戻ったら、ちゃんも慰謝料も払います。ですから、まず始めに謝罪だけでもさせて下さい。本当にすみませんでした」

男性は痛みなんか忘れてしまったのか、開いた口が塞がらない状態で固まっていた。あまりにも突然の出来事すぎで、脳が回らず混乱したまま、男性はとりあえず首を横に振った。
「いや、いい……べつに慰謝料とかいいから……」
慌てて男性は土下座している青年に言った。

「なにが、どうなってるんだ……」
訳の分からないまま、ユウマは呟く。先程まで、殺すような勢いで人を蹴っていた奴が、突然、頭を下げて謝罪をするか……と。彼の行動に疑問を抱きながら、彼の謝罪の様子を見ていた。
「本当にいいから！　気にしないで!!」
「すみませんでした。もう二度としません」
「もういいってば！　慰謝料も謝罪もいらないよ！」
「一発殴ってもいいんです、むしろ殴った方が……」
「殴らないよ！　だから頭をあげで!!」
第三者がこの様子だけをみたら、中年男性が青年を虐めているようにも見える。周りの人たちはもはやどっちが悪いのか、分からなくなってきている。

すると、頭を下げている少年は、誰にも見えないところで静かに笑った。

「ありがとうございます……さて、と」
起き上がって、もう一度男性に頭を下げてから、少年はパンパンと服に付いたホコリやゴミを落とした。そして、大声で叫んだ。
「おまえら、俺の画像をみて、言ったよな？　いじめられている所を目撃したら助けるって……」
ビッと、ユウマを指さしてさらに声を張り上げる。
「実際に男性を助けたのは、彼だけだ!!　なにが助けるだ、そんなもん口先だけだろ！」
彼はわからなかった。今、何で自分がこんなことを言っているのか、何でこんなに必死になっているのか。

わからなかった。

「助けて。そう思って期待しているんだよ。おめぇーらには解らねーよな!!　やられてる側の気待ちが！　どんぐらい辛い思いして我慢してるか！解らないよな!?　テメーらの倍は辛い思いしてんだ!!だから助けて欲しくてしかたないんだ!!」
日本語がおかしい事はとっくに知っている。でも、それでも彼は止まらなかった。
「だから俺は、同情だけして行動しない偽善者が大ッ嫌いなんだよ!!!!!」

彼の叫びで、その場の空気が一変した。
その空間で聞こえるのは、ハァハァと、乱れた息を落ち着かせる彼の音だけである。それ以外は何も聞こえない。本当は聞こえているはずの自分の呼吸さえ、この時だけは誰にも聞こえなかった。
シーンと静まり返える。彼の演説中、誰一人と目をそらす者は居なかった。それほど、彼の叫びは観衆の心に重く響いたのである。

「同情するなら虐められてる方がマシだ」

そう言い残すと、少年は後ろを向き、足を動かす。

その背中は、少し寂しそうで、悲しそうで、でもその倍は力強かった。

そんな背中にたくさんの視線が集中するが、彼は気にすることなく、ズボンのポケットに握りしめた自分の手を突っ込んで、何も言わずスタスタと歩き続けた。

「あの写真……皮膚にボールペンで肉を削ぐそうに、落書きされてる被害者って、おまえか？」

向井　ユウマが、或の背中に向かって言葉を投げかけた。一度、彼は歩みをやめ立ち止まる。

「さあ、な」

振り返ることなく、彼は再び歩き出したのだった。

部屋から出ると、俺はしゃがんで頭を抱えた。

「何やってんだよ……俺は」

最初は、あんなこと叫ぶつもりはなかった。本当は、謝罪して終わるつもりだったけど、何故かあんなことを叫んだしまった。

最初は完璧だった。

近くにいた中年男性を狙ったのは偶然ではない。何人かクリアし

ている人を見て、素直に喜んでいたのを確認済みだ。優しい人物になら暴力を振ったあと、キチンと謝罪すれば許されることは知っている。謝ったのに許さないと罪悪感を感じるからだ。

もしそれで俺の選択ミスで、あの人が逆ギレした所で、非は全て男に向かれる。

基本、必死に謝っている相手に暴力を振るう奴の株は落ちる。それが人間の基本的な心理である。それが例えば、殺人を犯したとなれば話はべつだが、相手の命を奪わないかぎり大抵は許してもらえる。それが美少女や美青年なら尚更である。

だから俺は優しそうな彼を選んだ。しかし、問題はその後だ、思ってもいないことを叫んでしまったばかりにとてつもなく恥ずかしい。

謝ったあとは、助けてあげた青年の名前を聞いて去るつもりだったのに、自分のよく分からない、なくなったはずの感情が暴走した。これは本当に予想外だ。

『それは君が助けて欲しかったからだよ』

偽善者ぶってる自分が優しく笑う。

「……そんなわけないだろ」

俯いたまま、自分に言い聞かせる。

『気づいて欲しかったんだよね？　自分という存在が』

ニッコリと笑ったまま、俺は俺に近づいてくる。

「くるな……！」

『存在を否定されて悲しかったんだよね』

「やめろ!!」

『独りが……嫌なんだよね？』

目の前でとまり、しゃがんで頭を抱える俺を俺は見下ろした。

惨めな俺を、俺は見下ろした。

『なら、信頼できる人を作ればいい』

簡単に言う自分に苛立ち、歯を食いしばる。ズキズキと、今はあるはずが無い、昔付けられた傷が広がるような感覚が俺を襲う。

あのゲームで選出された俺の画像は、中学の頃、虐めをしていた主犯がボールペンで俺の肌に絵を描くという建前で、肉ごと削ぎ落とされている最中の写真だ。

俺の左鎖骨辺りに大きく【死ね】と彫られ、俺は先端恐怖症を起こした。ボールペンを見るだけで鳥肌が立ち、恐怖で足や手の震えが止まらなくなるほどだった。

尋常じゃない痛みと苦痛が襲い、声を出して痛みを弱くでもしなければ、俺は今生きていない。そう錯覚するぐらい、あの痛みは恐怖でしかなかった。肉を削がれ、ボールペンの先が俺の骨にまで届くぐらいに、深く、深く突き刺さった。

今は、傷口を縫ってもらい、目立つような深い傷は誤魔化すためにタトゥーをすることでどうにかなった。

先端恐怖症もどうにか克服し、今は問題ない。その日から俺は、彼らを見返すために体に付いた脂肪を落とした。結果、奴らは手を出さなくなった。体重が落ちたからか、体が軽く感じて、自分が思っていたよりも素早く動けることが出来たことに驚き、放課後呼び出された時に奴らを力でねじ伏せた。

俺がイジメの主犯者を倒したことが広まると、他に虐めをしたいた奴らも媚を売るように、自分から近づいて来るようになった。男も、女も、助けを求めても無視し続けた先生でさえも、みんなが近づいてきた。

その時からだ、俺は感情を失った。
その時からだ、俺はヒトを信じられなくなったのは。

「……そんな簡単に、信頼できる人なんて出来たら苦労しねぇよ」
フラフラと立ち上がり、前を向く。足に力が入らなくて、よろっとしてしまうが、どうにかして踏ん張る。
自分の両頬をパチンと叩き、切り替える。

俺は、青年でいなきゃいけない。

子供のままじゃ行けない。

人にいいように思われないといけない。

例えそれが、悪い方向に向いても、やらなくてはいけない。

それが俺であり『アルシエル』でもあるから。

『アルシエル』は、自分の声を聞いて、感情を見つけなくてはならない。人を笑顔にするためでもあり、自己利益の為でもあるから。

――たがら、俺は……

何も感じない心で、俺は無理やり感情を創り出す。嬉しくもないのに、表情筋を使って頬に力を入れて、口角を上げて、誰が見ても、笑顔と分かるような顔を作った。
「次、頑張ろう！」
感情のこもっていない、機械みたいな声で、それでいても綺麗な低い声で。

彼、早瀬　或は、進まないといけないのである。

幼女

チホを探すべく、或は新しく来た場所をうろちょろしていた。しかし、どこを探しても見当たらなく、或の心は正直折れかけていた。

「どこにもいない……もう先に行ったのかな」

一生懸命にチホを探す或はとても心配で仕方ない様子である。

先程、チホ電話を掛けたのだが、通話中だったり、通話が終わった頃合に電話しても出なかったりと、或の不安が募るばかりだった。

「さすがにメンタルケアーしないとヤバいな」

ゲーム中に選出られた裸の画像、アレは相当運が悪かったと或は思っている。今後、色々行動する時にとても大変になると思われるうえ、その画像をネタにされかねない。

過去にも、或の晒されたくない画像をネット上に拡散されたことがあるが、それほど嫌なものは無い。自分で望んだ訳では無いのでなお更である。正直、死にたい。そう思えるような精神的苦痛を受けたほどだ。

特にチホは運悪く、彼氏宛にとはいえ、自分の裸の画像を世界中に見られたと言うことになる。男性からの視線が集中し、写真を撮られることにもなる。そのような意味で、チホは有名になってしまったのだ。

――つまり彼女は、あの写真が流出したことによって、〝そのような目〟を向けられることになる。

それに耐えられるようにしなければ、彼女のメンタルはボロボロに砕け散り、最悪自殺しかねない。そのような可能性が少しでもある限り、或は安心することが出来ない。

「とりあえず、もう一度電話した方がいいな……」

ポケットから携帯を取り出し、チホ宛に電話を掛ける。
しかし、五コールたっても出る気配がないので、或は暗い顔で電話を切った。静かに溜め息をつき、ポケットに携帯をしまった。そして、無言で歩き出す。
「……何があったんだよ」
何故がチホのことを心配している自分に、正直驚きを隠しけれていなかった。他人のことなんかどうでもいいと思っている自分が、チホの行方がわからないだけで、こんなにも心配し、不安になる自分が不思議で仕方なった。

――こんな感情、久々だ。

そう、思った。

これがチホでは無かったら、きっとこのような事にはならないだろう。偽善者の『俺』が、自分がいいように周りから見えるために、まったくどうでもいい赤の他人の事を心配し、探すことはあるかもしれないが、見つけた時の達成感などの感情は何も無い。不安がある訳でもなく、自分から探したい訳でもないため、正直見つけても見つけなくても変わりはないのだ。
ただ、やっと見つけた。その一言だけである。

しかし、自分のことを「信じる」と言ってくれたチホには、今までどうでもいいと思っていたものではなく、たぶん、心から心配しているのだと、少年は感じていた。
あまりにも久々すぎる感情のため、若干、戸惑っている自分がいることに、驚くほどである。

考え事をしているせいか、ぼーっとしながら歩いていると、少年は誰かとぶつかってしまった。

「あっ、ごめんなさい……!!」
ハッと、意識を取り戻すと、そこにはシマシマの角が見えた。
「おい、駄人の癖に気安く話しかけるな。まさに【悪事身にとまることを知らぬ罪人】……だな」
或は角のさらに下の方に視線を向けると、シマシマの角のついたカチューシャを、長くきれいなサラサラの白髪につけた、まつげの長い、顔の整っているロリっ子美少女がそこにはいた。
背が低く、年齢はだいたい小学四、五年生くらいと推測される。しかし、純粋な小学生ではしないような、汚物を見るような冷たい目で、或を睨みつけていた。
「全く、これだから愚人共はいつまで経っても、知能の低い愚人なのだよ」
或を見下すように顔を上げる白髪ロリっ子。出会って早々、少しぶつかっただけなのに酷いい言われようで、普通の人なら軽く凹むか、怒りで感情が染まるだそう。しかし、彼はそうはならなかった。理由は一つ。
「……あっ!? もしかしてだけど、リア生で超有名人の三角　マルキ!?」
彼女のことを知っていたからである。
リアアカに閉じ込められている事で薄れてしまっていた或の記憶が、底に眠っているはずの引き出しをスっと開き、目の前にいる人物の名前を蘇らせた。
その正体がマルキと気づいた或は、指をマルキに向けて、つい大きい声で叫んでしまった。
或は、彼女のコトをよく知っている。彼自身も週に一回、人前で歌

う練習をするために生放送をしているのだが、その時に、他のチャンネルで彼女……三角　マルキの生放送をしているのをよく見かけていた。或の放送が終わって、まだマルキの生放送がやっていた時、彼も興味本位でよく見ていた。
　何度かコメントも読んでもらったこともあり、結構な回数、彼女との一方的ではあるがコミュニケーションはとったことがあった。

　しかし、彼女はそんなことを知るはずもなく、眉間にシワを寄せ、或の指した指をペシンと叩いた。

「私にその、薄汚い穢れた指を向けるな駄人め」
「すげぇ、本物だ……初めまして、早瀬　或です」
　つい、或はマルキの言ったことを無視し、自分の名前を無意識に言ってしまった。それほどまでに、彼女には何か特別なオーラを持っているのであろう。

「私は駄人などに興味すら湧かない……まさに【神に媚を売る愚人】だな」
「……やっぱり俺は、そーゆー人に見えるんなんだな」
　それもそうだ、と。一人で納得する或であった。

　ちょっとした興奮も、マルキの言葉で瞬時に冷め、自我を取り戻すことに成功した或。本人は罵られているのにも関わらず、感情が麻痺しているため、普通でいられた。罵られて喜ぶこともなく、悲しむこともない。顔に出るのは「無」だけであった。

　それに少し驚いたのか、ピクっと体を微動させ、固まるマルキ。しかし、それはほんの一瞬の出来事であり、すぐさま何事も無かったかのように振る舞った。
「……早瀬　或と言ったな。ほんの少しだが、お前に興味が湧いた。私の名は……知っていると思うが三角　マルキだ。だが、私と話せた

からと言って、調子に乗って気安く話しかけるな」

するとちょうど良く、マルキが言い終わった後に、天井からマーブルが逆さになりながら登場した。

「はい、みなさーん。第一ゲームお疲れ様でしたー!! それでは、第二ゲームを始めますの二人一組になって、ブースの中に入ってくださーい!」

マーブルの間延びした声が部屋中に響き渡り、全員に伝わる。

つい先程、『悪いいね!ゲーム』が終わったらしく、或が最初入った時よりも、かなりの数の人がうろついていた。

「……二人一組だそうですよ。もし良かったら、俺と組んでいただけませんかね?」

断られること覚悟で聞いた或は、次の予測すらしなかった言葉に軽く驚くことになる。

「……フン、仕方がない。今回だけは特別だ。無力で役に立ちそうにないお前と組んでやろう。まさに【罪人に問わず優しき心で接す】……だな」

そう、ドヤ顔で捨て台詞を言い残すと、マルキは一人でスタスタと、ブースへ向かって歩き出した。苦笑いを浮かべながらその後を追うように、或も続いて中に入っていったのだった。

中に入ると、そこには大きな画面が表示されており、その画面と向かい合うようにソファーが置かれていた。

マルキがなんともない顔で、ドスっとソファーに座り、脚を組んで、肘をつき、頬杖をした。その姿はまるで、女王様のように見える。何度も何度も経験しているからか、緊張という二文字を知らない人みたいに、画面の前では胸を張り、いつも以上に堂々としていた。

「さあ、愚人共、私……三角　マルキが、ゴミのように下らないお前らの悩みを聞き、人生相談してやるのだよ」

そう言うと、画面からは大量の文字が流れてきた。

［キタ――――――（。∀。）――――――!!］

［マルキ様ァーー!!!!］

［もっと罵ってくださーい!!!!］

マルキは不敵に笑うと、視聴者に向かって

「まさに【光に集う害虫】……だな」

――そう、言い放ったのだった。

生放送

或は驚いていた。

まさか始まってたった数分間で、視聴者数が五万人以上になっているからだ。

自分も生放送を何回かやっていたが、ここまでリスナーが来たことはない。よくて約一万人。少ないときだと百人にも満たない。だからだろう、生放送でこんな人数に見られるのはさすがに緊張した。

彼は昔の写真を載せてはいるが『アルシエル』本人の顔を露わにしたの初めてだ。まあ、フードを深く被ってはいるが、頭からつま先まで、じっくりとリスナーに見られるのは初経験である。

「……そうだな。せっかく二人組になったんだ、そこにいる駄人の悩みでも解消してやるか」

［おおっ!!　さすが！］
［いいなー］
［マルキ様ぁー!!!］
［優しいマルキ様ｈｓｈｓ（＊、Д、≡、Д、＊）ｈｓｈｓ］
マルキは後ろを向いて、或を呼ぶ。
「駄人、さっさと来い」
「は、はい」

裏返りそうな声を堪えて、恐る恐るマルキに近づく或。マルキの隣に静かに腰を下ろし、様子を伺うようにチラチラと盗み見する。いっけん、挙動不審になって落ち着きのないように見える或。

しかし、彼……アルシエルがこのように慎重に行動するのには、きちんとした理由があるからである。

マルキのように、ファンが沢山いて誰もが知っているような有名人

に、変に馴れ馴れしくしたりすると、リスナー、もといファンにフルボッコにされてしまう結末を知っているからである。ファンが持っている『嫉妬』と言うものは、本当に危険なものである。
有名人など、手の届くことのない憧れの人は、ファンに平等に振る舞うのが当然。

――だからである。
少しでも抜け駆けした奴はファンの間で叩かれ、ネット社会で始末されることですらあってしまう世の中なのだ。

顔を覚えられた。

話しかけられた。

友達に近い存在になった。

その事実があるだけで『嫉妬』という感情が生まれ、負の感情で心が染まる。有名人であればあるほど、その感情は大きくなるのだ。誰もが平等でいないと蹴り落とされる。それが、抜け駆けした罰であり、ルールだ。そういう世界なのである。
そのルールは、誰もが話すわけでもなく、受け継ぐわけでもない。
人間の残念で黒い部分を、誰もが持っているから語り継ぐ必要が無いのだ。
『嫉妬』は、この世界では普通の感情と化された。つまり、抜け駆けした奴には罰を与えてもいい。そう、思われるようになる。

だからネット社会の間で【抜け駆けしない】と言うとは、暗黙のルールとなっている。

そんな様子を近くでよく見てきたアルシエルだからこそ、このように行動したのだった。

［そこ変われ］
［羨ましいー］
［ずるいー］
隣に座った瞬間、このような嫉妬コメントがちょくちょく見られた。
やはりかと。或はある程度予想してはいたので、さりげなく座っている距離を遠ざけた。
「さて……或だったか。何か悩みを言ってみろ。正直耳が腐りそうだが私が相談に乗ってやらなくもない」
離れたことに気づくことなく、マルキは上から目線で或にそう言い放つ。
そう言われた或は、頭を掻いて少し悩んでしまった。
「んー、悩み……ですかー。何かあったかなー」
確実に自分よりも年下の相手に、気を配りながら敬語を使う自分自身に自嘲した。
確かに、相手の方が圧倒的に有名人で、なおかつ人気者だと理解している。しかしそれでも『アルシエル』としてのプライドが邪魔をする。
しかし、今の状況を察して誰にも分からないように、静かに息を抜いた。
チラリと、目線を画面に移して見ると、コメント欄には様々なコメントが流れていた。が、ここで一つのコメントが目に写った。
［この人、さっきのゲームで凄いことといった人じゃんw］
そのようなコメントが流れた瞬間、他の人たちも便乗するようにコメントしてくる。

[あっ、蹴って土下座したイカれた野郎だっけか？ｗ]
[なにげ正論いってて草生えた]
[目が死んでて怖かった]

「……ほう、面白そうだな。その事について詳しく聞こうじゃないか」
興味を持ったのか、マルキは口角を上げ、或の方に顔を向けた。体を前のめりにして、いつでも聞く準備が万端だとでも言うかのように視線を逸らすことなく、或の目を見続けた。
マルキの目は、興味があることをを包み隠すことなく、キラリと瞳を光らせた。
その眼と、リスナーから見られているという状況で逃げ場がなくなってしまった事に気付き、或は心の中で舌打ちをして、ニッコリと微笑んだ。

「ちょっと偽善者の奴らに、喝を入れようとしただけですよ。その結果、一人結構な傷を負いましたが……」
「なるほど……偽善者の奴らとやらには、どの人間に向けて言ったのだ？」

その言葉に、少年はピクリと反応した。

少年は思った。
ここでなら、俺は本当の自分をさらけ出すことが出来る。
今の状況で、俺自身が『アルシエル』と言うことはごく一部の人間しかしらない。
コレはチャンスだ。
俺、早瀬　或としてここで思いを伝えればそれでいい。

しかし、それには大きなリスクが伴っている。
そう、俺が『アルシエル』だと知った時のファンの反応である。

俺が人間を蹴っていた。という事実は変えられることではない。たとえ、本人に許しを得たとしていても、同じ人間を虐めていたと言う事実だけで、全ては決まる。
だから、もし、ここで少年の本質をさらけ出したとして、後にネットで正体がバレたら……

「ふっ、だからなんだよって、話だな」

ギラり。
誰にも聞こえずに、空気に溶け込んだ言葉は、どこか棘を持っていた。

鋭く尖った眼にはハイライトはなく、まるで人が変わったようになった。
今更ビクビク恐れていた所で、何も変わらない。
『アルシエル』というヤツが或だとバレるのも時間の問題だ。ここ、リアルアカウントにいたら尚更である。
偽善者が嫌いで、でも、自分が偽善者でいる。そう言う矛盾に違和感を感じなくなったのは、歌い始めてからだったな。
そんなことを思いながら、或は口元に弧を描いた。
「あぁ、あの時あの場にいた間抜けズラの、クズ人間共にだ」
「ほう……」

コメント欄で、煽ってくるような文字が見受けられたが、或はそんなことなんか気にすることなく続ける。
「アイツらは、俺の画像をみて酷いといったんだ。そして、俺がヤツらに挑発した。そしたらなんて言ったと思う？　アイツらは逆ギレしながら『虐められているヤツらがいたら助ける』なんてほざきやがったんだぜ？　だから、心から思っているかどうか、実験したってわけ」

「……そうか」

仮面を外し、本性を露わにした少年に、マルキは興味が湧いた。
先程の優しい人とは思えない、優しい目から一変、鋭く尖った刃みたいな目には、復讐の因縁がチラリと見える。
荒ぶった口調には、躊躇いなど一切感じない。むしろ、傷つけるためだけにあるのではないかと錯覚するようだ。

そして、何より驚いたのは、この人も、自分の素が分からなくなっていることだ。

自分を偽って、偽って、偽って、偽って。
出来上がったのがさっきの優しそうな人間。でも、本当の自分ではなくて、仮面を被り、素顔を誤魔化すピエロ。
誰も知らない、誰も知ることのないピエロの素顔は、いつしか自分ですら本物が分からなくなって、偽りを本物と思い込む。
しかし彼はまだ、心の柱があるお陰で、自我を保てている。まだ、自分を見失っていない。

――マルキ（わたし）と違って。

マルキは、少し羨ましいと思った。マルキととても似ていても、まだ、自分が残っている彼……早瀬　或を。
「【類は友を呼ぶが同一ではない】か……」
そう、彼女は呟いたのだった。